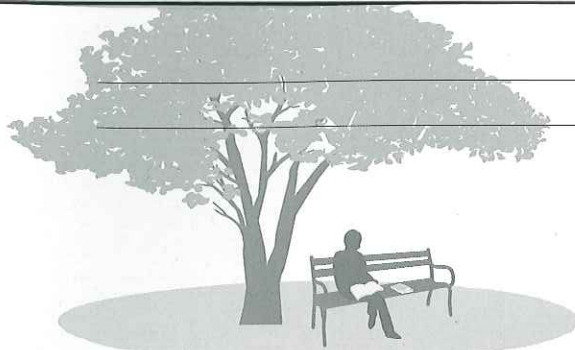


晴れときどき書評

『地球研ニュース』には、所員が自著紹介する「出版しました」のコーナーがありますが、この新コーナーでは、地球環境学にかかわる注目すべき本、おすすめの本、古典などを幅広く取り上げて紹介します

安成哲三（地球研所長）



地球研の設立当初からのミッションの柱は「人間と自然の相互作用環の解明」であり、もう一つが、「地球環境問題の根源は人間の文化の問題」という視点である。もちろん、この二つのテーマは相互に密接に関係しているはずであるが、どうもよくわからないという人も多いのではないだろうか。

自然と人間は本来、不可分なものである

オギュスタン・ベルクの『風土としての地球*1』およびそのフォローアップとしての『地球と存在の哲学*2』は、この疑問への一つの明快な答えを用意している。ベルクは地球研にもなにか来られたことのある世界的なフランス人地理学者あるいは哲学者である。「風土」といえば、和辻哲郎の名著『風土——人間学的考察*3』であろう。和辻は風土を「人間存在の構造的契機」としての風土論を展開したが、ベルクは和辻の「風土」を出発点としつつも、より新たな視点を導入して「風土としての地球」を著した。

ベルクは「風土」の定義を、「ひとつの社会と、空間および自然との関係」としている。地球も宇宙も生物圏も、これらを含めた自然は本来人間が存在しようがしまいが存在している。しかし、私たち人間が認識している自然は人間の内において、そして人間の周囲で意味をもって現われる。人間の意識を通してかならず自然は、(人間の)文化に固有の表現となって現われる。すなわち、自然と人間は本来、不可分のかたちで存在し、それぞれの固有の気候・生態系・地形条件のなかで固有の関係性を築いている。風土とはまさにそのことであり、その質は、資源、制約、リスク、アメニティといった、自然が社会に対してもっている意味で決まってくる。たとえば、石油は地質学的な自然としては存在しても、人間社会の経済のあり方や石油技術があつてはじ

地球と人類の未来のための新たな「風土学」の重要性

オギュスタン・ベルク
『風土としての地球』
などをめぐって

めて人間にとっての資源としての石油となり、自然にのみ属するわけでも社会に属するわけでもないもの、つまり風土に属するものになるとベルクは説明する。

近代科学内で語られる環境問題の限界

ベルクの定義する風土に従えば、それぞれの地域あるいは最終的に地球全体に住む人間と自然の相互作用環の解明とはまさに、地球における風土のあるべき姿を明らかにすることにほかならないと私は考える。「文化の問題」としての地球環境問題とは、それぞれの(人間)社会と自然の関係性の表象としての文化のあり方を問うという問題にほかならない。

しかし、この人間と自然の歴史性・空間性のなかで築かれてきた風土が、とくに17世紀以降の西欧の近代性により大きく壊されてきたこともベルクは同時に指摘する。たしかにデカルトの二元論に端を発する近代科学は、自然を、人間が自分とは独立した現象・事象として観察することにより発達してきた。ベルクは、西欧の絵画に自然の「風景」が登場したのも近代科学の黎明とほぼ同時期であり、風景画の発展と人間による自然、あるいは人間を囲む環境の支配とのあいだには基本的な相同性があると指摘する。このおなじ距離のとり方から近代科学の客観的視点が芽生え、個人主義もまた芽生えることになったが、同時



にこの近代性は科学、芸術、倫理という三つの世界を分離させてしまうことにもなった。その結果、地球環境問題は「環境科学」という近代科学の枠内での研究対象となり、調査研究をすればするほど、ますます風土としての地球の理解から遠ざかることへの懸念もベルクは表明している。

「有限な地球」は新たな風土学の出発点

しかし、近代性のもくろみが「普遍性」を活用できたのは、まさにそれが無限で均質の空間を想定したからである。その空間のなかでは、それは「生態学的な面」でも、資源の限りない開発に支えられた「象徴的な面」でも、科学と理性のたしかな真理に依拠して展開することができたからであろう。そしてこの近代性への幻想は、20世紀の後半になって、地球の生態学的キャパシティが無限でないことがわかったときに、また地球の表面が普遍的な空間などではなく個別的な場所と生態系の織りなす生物圏であることが判明したときに、つぶされたことも彼は指摘している。

有限な地球でいかに「人間らしく」存続できるかが、いま私たち人類に問われているが、ベルクは「風土としての地球」という概念を提出することにより、すでに20年前に、その具体的な手法も含めて議論している。まさにおなじ問題意識をもつ地球研の研究者として、彼の「風土学」をあらためて学ぶ必要があろう。



2013年12月、地球研を訪問されたベルク氏(写真中央)と筆者(左)。右はファン＝デール・サンデル・エルンスト氏(当時、地球研招へい外国人研究員)

*1 オギュスタン・ベルク『風土としての地球』筑摩書房 1994

*2 オギュスタン・ベルク『地球と存在の哲学——環境倫理を越えて』筑摩書房 1996

*3 和辻哲郎『風土——人間学的考察』岩波書店 1935 (岩波文庫にも収録されている)本書は、ベルクによってフランス語に訳され出版された。

Tetsuro Watsuji (auteur), Augustin Berque (traduction), Fudo : Le milieu humain, éditions du CNRS, 2011